

ICT を活用した教材作成の技術と 初級英語クラスでの実践例

北村 孝一郎
神田外語大学

Developing and Using ICT-based Teaching Materials for Beginner Learners of English

Koichiro Kitamura
Kanda University of International Studies

要旨

本稿は、言語教育への ICT 導入について、初級英語クラスにおけるデータベースを利用した教材の作成技術と実践例から、その有用性を明らかにする。ICT によって利用可能となる会話例と音声素材の活用事例を、英語による円滑なコミュニケーション能力の育成を目標とした、学習者の推測と発見を促す言語形式の導入、発話意図を考慮した音声活動、場面と人間関係を意識した適切な言語使用を促進する社会言語学的知識の学習の3つの言語活動において示す。「これからの時代に適応した新たな教育・学習環境の構築」を実現するため、ICT を活用した教材の開発およびそれを運用する技術の発展と普及に向けた教育研究活動を提案する。

キーワード： ICT 英語教育 教材作成技術 教育実践活動

1. はじめに

グローバル化の進展にともない英語の国際語としての地位が高まる中、英語を母語としない話者がコミュニケーション能力を發揮するためには、情報を伝達する言語形式に関する知識だけでなく、人間関係を構築する適切な社会言語学的知識を備えることが求められる。神田外語大学では、英語を母語とする語学専任講師による実践的な指導に加え、授業外にも SALC (Self-Access Learning Center) での学習アドバイザーによる自律的な学習を促す支援があり、学生がコミュニケーション能力を向上させる環境が充実している。しかしながら、本学国際コミュニケーション学科には英語の学習経験が少ない、あるいはほとんどないアジアの国々からの学部留学生の存在があり、彼らの中には英語により提供される学習支援の恩恵を受ける準備が十分でない学生も少なくない。

本学科では、そうした学生の英語学習を支援するため、留学生のための英語コース (English for International Students) を設置しており、そのうち初級者向けの Basic English I・II (以下 Basic English) では、彼らの第二言語である日本語を併用して授業を進めている。入学時のプレイスメント・テストにより、Basic English の履修を義務づけられる留学生の英語力は、日本の中学校 1 年生から 2 年生レベルに相当する。履修者は、英語の学習経験こそ限られているものの大学生であり、それぞれが高い日本語能力を有する外国語学習成功者である。そのため、基礎的な言語形式の導入に際しても人間関係を構築するツールとして、社会言語学的知識と関連させて英語運用能力の向上を図っている。

英語母語話者による授業および学習支援により期待できる実際のコミュニケーションを通じた学びの機会不足を補うため、Basic English の授業では、英語が使用される場面と人間関係を意識した言語活動に有効な資料として、NHK 英語データベースを利用している。特に 2014 年に開発された英語教材作成支援システム『基礎英語 LEAD (Learning English Abilities Developer) 』(以下 LEAD)

によって十数年に及び蓄積されてきた NHK 語学番組『基礎英語』シリーズで扱われた会話例の中から適宜必要な形式や表現の検索、授業での利用が可能になって以来、積極的に ICT を活用している。

2. 目的

本稿は、初級英語クラスで実践しているデータベースを利用した教材の準備方法と授業での実践例を取り上げることで、英語教育における ICT 活用の利点を示す。データベースの活用は、Basic English クラスのように授業のすべてを目標言語で行うことが難しい初級レベルの学習環境、すなわち日本の初等・中等教育の現場においても、学習者に豊富な英語の使用例を提示する有効な方法であることを明確にする。英語教育用コーパスをもとにした教材の作成と授業での運用を支援する ICT は、教員個人の英語の知識、運用力の差や母語話者による支援の有無に関わらず、言語形式の使用例および社会言語学的知識を学ぶ一定の機会を保障するため、これからの時代の英語教育に有用な技術として普及されていくことを期待する。

3. 理論的背景

3-1 コミュニケーション能力の位置づけ

Basic English におけるコミュニケーション能力育成の理念は、Hymes (1972) の提唱した“communicative competence”の概念を言語教育の観点から定義した Canale and Swain (1980)、Canale (1983)、さらにそれを言語能力測定の観点から展開した Bachman (1990) のモデルに基づく。すなわち、communicative competence を構成する要素である文法能力・社会言語学的能力・方略能力 (Canale and Swain 1980:27) および談話能力 (Canale 1983:9) はそれぞれ単独的ではなく相互補完的に機能している。“Communicative language ability” (Bachman 1990:81) を獲得することは、言語の構造と言語の運用における社会的・心理的な機能の操作を含む。これらの観点を踏まえ、Basic English では学生のコミュニケーション能力向上の

ため、語彙や文法形式を知識として持っているだけでなく社会文化的な規則を考慮して適切に、時に方略的に、英語を運用していけることを目標としている。

3-2 コミュニケーション能力を促進する言語活動

コミュニケーション能力を育成する授業の実践に際しては、木村(2011:28)の提唱する指導原理のうちの Purpose(目的)にならい、「可能な限り実際の発話を想定した真性(authenticity)の高い目標」の設定と「場面、人間関係、ことばの働きを意識した活動」を念頭に置いている。また、異文化におけるコミュニケーション能力については、塩澤(2010:14)の指摘する通り「意識的に学習しないかぎり自然には身につかない」という認識から、Basic Englishでは英語圏の文化におけるポライトネスの概念(Brown and Levinson 1987)あるいは相手に配慮した言語ストラテジーの例を、明示的に取り上げることでその育成を図る。英語学習の経験が浅く英語圏の文化と接する機会も少ない学習者にとって、教材は英語における対人関係の捉え方を理解する重要な窓口である。そのため、授業ではICTの活用により、場面と人間関係の設定がわかりやすい会話例を用い、円滑な英語コミュニケーションを支える社会言語学的知識およびストラテジーを意識的に学ぶ機会を提供している。

4. 方法

英語の授業において、指定テキストとは別に、学習者の関心を引いたり特定の表現や形式に焦点を当てたりするため、あるいは既習事項をスパイラルに学習させるために、利用できる資源を有する利点は大きい。ただし、素材の利用にあたっては、持ち合わせる量、必要に応じて持ち出す手間と時間、そして著作権の問題など制限がつきものである。実際、NHKの語学番組『基礎英語』シリーズにある会話例や音声などを部分的に授業で引用しようとしたとしても、その膨大に蓄積されたデータベースから個人が目当ての素材を

見つけられる範囲は限られている。しかし、株式会社 NHK エデュケーショナルにより LEAD が開発されたことで、NHK 英語データベースから言語活動に役立つ会話例を WEB 経由で検索し、音声とあわせて教材作成用の素材として利用できるようになったため、Basic English ではこの ICT ツールを適宜活用している。

LEAD は、NHK エデュケーショナルが地域、学校単位で申込を受け付け、英語担当の教員 1 人ずつにシステムアカウントを発行、サーバー・WEB を通して提供する有料のサービスである。データはすべて権利処理がされており、著作権を気にすることなく文書のコピーおよび音声のダウンロードが可能となっている。

検索項目は、データベースから特定の表現を探す〈自由検索〉と項目ごとに整理された表から探す〈カリキュラム〉がある。さらに検索方法として、〈自由検索〉の下には、相手を説得する・仲良くなるといった機能条件および文型選択による〈センテンス〉と、レストランなど場面ごとの状況条件および旅行や余暇などの話題選択による〈スキット〉と 2 通り用意されている。そして、〈カリキュラム〉の下には、中学校学習指導要領をベースとした〈文法項目リスト〉と、呼びかける・礼を言う・褒めるといった言語機能と挨拶・自己紹介・電話でのやり取りなど使用される場面ごとに分類した〈言語表現リスト〉と 2 通り用意されている。本稿では、このように検索機能を搭載した ICT を用いて、Basic English における教育実践活動を報告する。

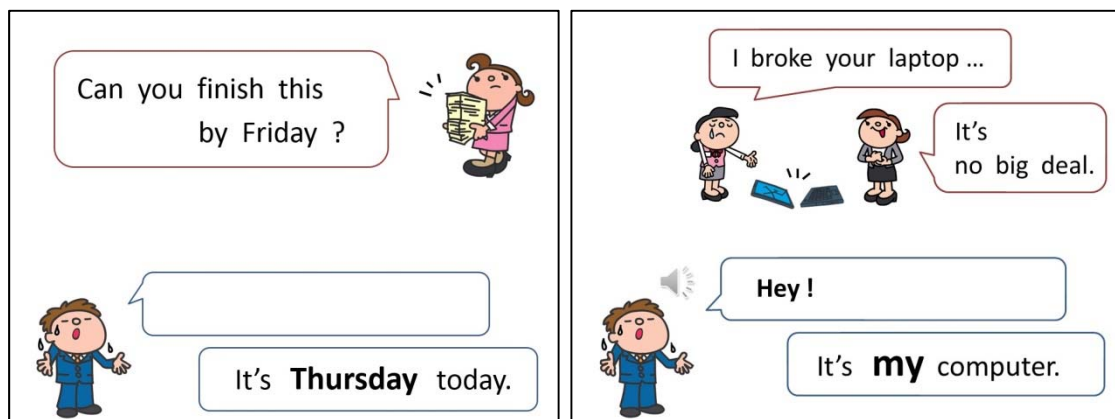
5. ICT を活用した言語活動

Basic English では、言語形式の導入、音声活動、社会言語学的知識と関連させた学習の 3 つの言語活動を、ICT を活用することで展開している。以下、それぞれの活動で NHK 英語データベース、およびその利用を可能にする検索機能を搭載した LEAD の活用例を挙げながら、ICT を導入する目的、その達成を支援する教材の作成方法と実践例を示す。

5 - 1 言語形式の導入

例① 意味の違いを文脈から推測する活動のための教材例

“Wait a minute.” or “Just a minute.” ?



例①に挙げた2つの表現“Wait” a minute.”と“Just a minute.”のように、日本語訳では同様（「ちょっと待って」）であっても意味が異なる例については、それぞれの機能を言葉で説明するかわりに文脈から推測して違いを発見させる帰納的な指導法も考えられる。ただし、その活動を実践するためには2つの表現が使われる会話例が複数必要である。このように、特定の表現を検索する場合、LEADでは<自由検索>を利用すると（図1参照）英語データベース内で検索した表現が含まれる会話を掲載している『基礎英語』の年度・シリーズ・月の情報とあわせて画面に表示される（図2参照）。

図 1



図 2

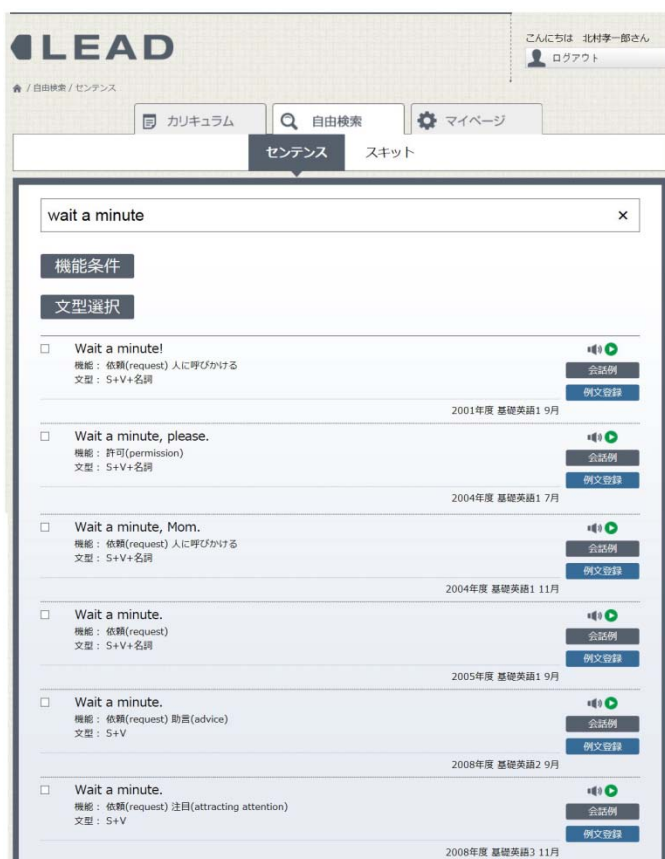


図 2 の画面下には“Wait a minute.”という表現が使用されている会話例が 30 件ほど一覧表示され、そこから続いて目的の例を選択するとそれぞれの会話のテキストが表示される（図 3 参照）。

図 3



2001 年度『基礎英語 1』9 月（LEAD）

会話例では英文に＜和訳表示＞をする機能があり（図4参照）、英文と和文のいずれのテキストもコピーすることが可能である。また、すべての英文に音声が付属しており、必要な箇所を選択してダウンロード（＜録音＞・＜保存＞）することも可能である。

図 4



2001年度『基礎英語1』9月（LEAD）

会話では、声の調子から話者の意図を推測できる要素もあるため音声を使用できる利点は大きい。特に、例①にある“Wait a minute.”という表現の場合、相手の言った内容に同意できないことを伝える台詞が続くときは強調して発話されることが多く「それはちょっとおかしいのでは？」といった発話の意図を推測する糸口となる。

“Wait a minute.”の例を検索するのと同じ手順で“Just a minute.”という表現が使われる会話例を集め、複数並べて提示すると両者の意味を区別して捉えやすい。さらに、その際に音声もあわせて比較することができれば、どのような場面で、こういった相手の言葉に対して用いるのか、使い方の違いを発見する手助けにもなる。

授業後半の部分では、ペアでそれぞれの表現が使われる場面を考えてオリジナルのスキットを作り、発表し合うことで楽しみながら

理解を深めていく活動へと発展させやすい。このように推測の過程を経て発見に至るように導く教材を効率的に準備できることは、ICT活用の大きな利点と言える。

例② 言語間の形式の違いに意識を向ける活動のための教材例

「タマの家族を紹介するわ。

これはタマの夫。そしてこの子たちはタマの赤ちゃんよ。」

“Let me introduce Tama’s family.

This is Tama’s _____. And these are her _____.”

2004年度『基礎英語1』12月（LEAD）を一部改変

Basic English を履修する学生にとって語彙を増やすことは急務であり、年間を通じて取り組む英単語テストの語数は1600語を超える。単調になりやすく、学生にとって負担に感じられがちな語彙力を上げる活動においては、例②の名詞の例のように、彼らの母語もしくは第二言語である日本語との違いについて気づきのある単語クイズとして導入することで、学習意欲の維持をねらえることもある。実際に、上の例文では「夫」にあてはまる英単語は単数形の“husband”であるが「赤ちゃん」には“babies”と複数形を入れる必要があり、言語によって数についての認識の仕方や表現の方法に違いがあることを学ぶことは、大人の学習者さらには多言語話者である学部留学生の間では興味深いという声が多い。

ICTツールの利点は、このようなテスト教材の作成が容易であることと、その応用可能性にある。以下にデータベースをもとにしたテスト作成の手順と、応用テスト用に一度作成したテストのフォーマットに当てはまる素材の検索方法をあわせて取り上げる。

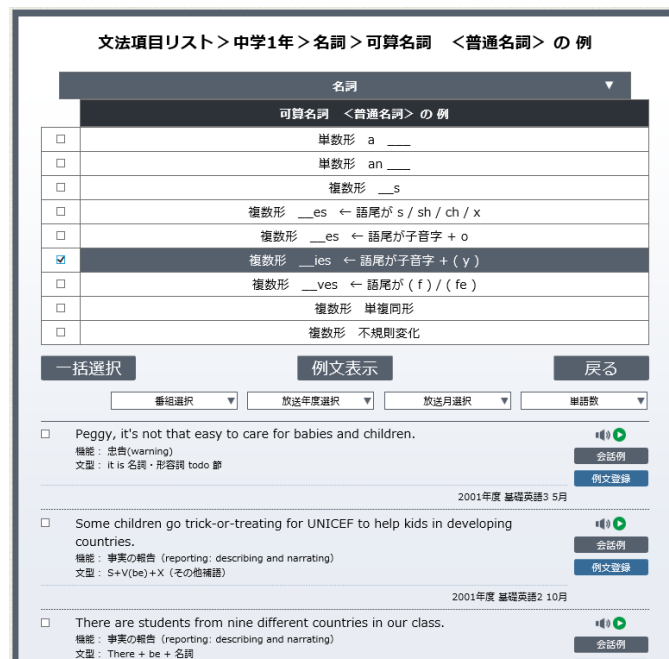
検索機能を搭載したICTツールを使いデータベースにアクセスすると瞬時に目的の素材にたどり着くことができるが、さらにNHKエデュケーショナルのLEADのように、検索項目が教育用に

整理されているツールの場合、英語学習の観点から関連する素材もまとめて集めることができる。例えば、例②のように名詞に焦点を当てると、<文法項目リスト>から検索をすると項目は名詞から可算名詞、普通名詞（図5参照）、単数形と複数形、語形変化へと下位分類してあるため、同じ語尾（-ies）の名詞が使われている会話例をまとめて表示させることができる（図6参照）。

図 5



図 6



LEAD は中学校の英語の授業での利用を想定しているため、学習進度に合わせて限られた文法形式に当てはまる名詞の例を検索できるように設計してある。例えば、中学1年生の授業のように be 動詞のみで（一般動詞の導入前に）名詞の単数形／複数形について取り上げる場合は、“I am ～. の文”／“We are ～. の文”（図7・8参照）と時制も現在形に限定した会話例の検索ができる。また、検索条件において『基礎英語』のシリーズを限定することで比較的易しい英語で書かれた例を中心に集めることもできる（図9参照）。

図 7



図 8



図 9



LEAD はデータベース上のすべての会話例について権利処理が済んでいるため、そのままデジタル・コピーしてパソコン上で加工することができる。他の ICT ツールでも著作権の問題がなければ同様の作業が可能であるが、英語教材作成支援システムとして教育目的で開発された LEAD には検索した素材を教材に加工する機能も備わっている。例②のように適語補充の問題を作成する場合は、〈プリント作成ページへ〉という項目を選択して（図 1 0 参照）、任意の箇所を空欄になるように変更を加えるだけで（図 1 1 参照）、印刷して使用できる機能が付加されている（図 1 2 参照）。同じ学習項目、例えば名詞の複数形についても、関連する素材がまとめて手元があれば応用問題を多数作成することができ、定期テスト用や自習課題用として利用することで学習の定着が図れる。

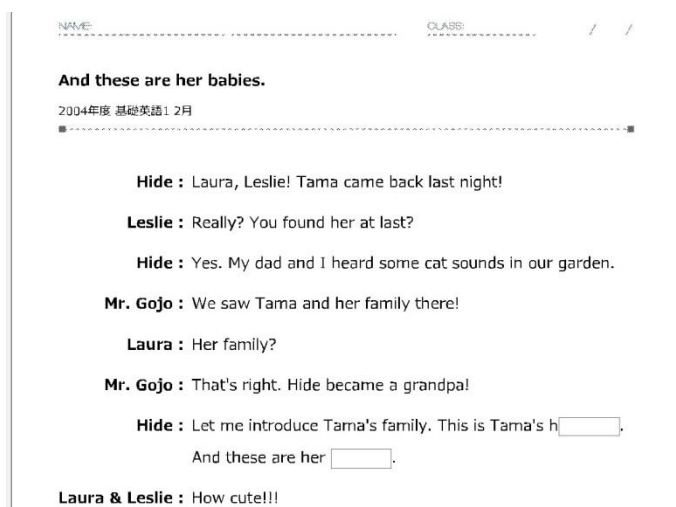
図 1 0



図 1 1



図 1 2



例③ 特定の場面でよく使われる表現を扱う活動のための教材例

「ご注文をお伺いしてもよろしいでしょうか。」

Chiaki: “Can I () your order?”

Man: “Yes, please.

I’ll have a ham sandwich and a cup of coffee”

2013年度『基礎英語2』10月(LEAD)を一部改変

(A) do (B) listen (C) ask (D) take

レストランでの注文や空港での入国審査のやり取りなど様々な英語の使用場面を取り上げる教科書やテキストは多くあるものの、1つの場面について会話例を10、20とまとめて学習できるものは少ない。目的とする使用場面に特化して多数の会話例を集めることができることは、データベースを利用した教材作成の大きな利点の1つである。特にLEADのように、蓄積量が膨大であり随時データが追加更新されているデータベースがもとになっている場合、得られる素材の量は、個々の書籍のそれとは比較にならないほど多い。

Basic Englishにおける文法指導の目標は、網羅的に学習させることであるが、既存のテキストだけでは導入する形式がどんな状況で

使われるのかを十分に学ぶのは難しいため、ICT ツールを活用することにより、なるべく学生にとって興味のある場面での会話を例に用いて不足を補っている。例えば、例③のように、接客の際によく使う表現などは、飲食店でアルバイトをすることの多い学部留学生にとってキャンパス外で英語を使う可能性の高い場面で役に立つ表現として関心を集めやすい。

例③のような特定の場面における会話例から英語クイズを作成する場合、LEAD では＜自由検索＞から＜スキット＞さらに＜状況条件＞へ検索項目を進めていくと(図13参照)、目標とする場面、ここではレストランでの会話例にアクセスできる(図14参照)。

図 1 3

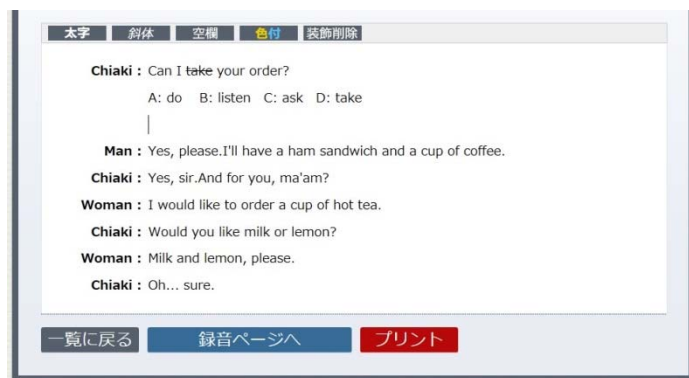


図 1 4



LEAD を利用した場合の教材作成の手順は、例②と同様で、選出した会話例の画面で<プリント作成ページ>の機能を使う。例②のように、会話文の一部を空欄にして適語補充問題を作成することもできるが、例③のように文の下に直接テキストを入力して選択肢を設けることで適語選択問題に仕上げることもできる(図15参照)。LEADには、プリント印刷用画面(図16参照)から作成した問題をそのまま印刷して配布することができるなど、教員の授業準備を支援する機能が備わっている。

図 1 5



2013年度『基礎英語2』10月(LEAD)を一部改変

図 1 6



素材を自身で加工することができれば、このような支援システムがなくても教材作成は十分に可能であるが、準備のための時間短縮

という点では総合的に機能が充実している ICT ツールを活用する利点は大きい。特に LEAD のように、すべての会話例に音声がついているツールは、言語活動の様々な場面で有効に活用できる。例えば、例③の問題をテストとして使用する場合、その答えを提示する際に、単に正解の記号を伝えるよりも会話全体の音声を聞きながら答えを確認させる方が、焦点を当てる文法形式や表現がどのような状況で、どのように相手に発話されるのか学ぶ機会を少しでも多く提供することにつながる。

5 - 2 音声活動

例④ 特定の文法形式や表現に注目を集めるディクテーション活動のための教材例

Listen to the sentences and write exactly what you here.

④ - 1 “Don’t be ___ to him.”

2011 年度『基礎英語 1』10 月（LEAD）を一部改変

④ - 2 “Why are you always so ___ to me?”

2010 年度『基礎英語 2』1 月（LEAD）を一部改変

④ - 3 Takeshi: “My dad and I are taking Mom out to dinner.”

Lisa: “That’s really ___.”

2001 年度『基礎英語 2』5 月（LEAD）を一部改変

例④にある英文に入る語 “mean”・“sweet” のように、よく知られる語義（「～を意味する」・「甘い」）とは違った使い方に焦点を当てる活動において、その語義を訳語で伝えたり辞書で調べさせたりする以外に、ICT を活用した導入方法も考えられる。これらの単語が注目させたい語義で使われている会話の例をデータベースから抽出することができれば、文脈から推測させる機会を提供できる。ICT は、そのための教材準備と授業での導入を容易にする。

ディクテーション活動用のクイズ作成にあたり、LEAD を利用する場合のテキスト上での加工手順は、上の例②・例③と同様で、ほとんど時間をかけずに印刷する段階までの準備が完成する。音声の準備についてもダウンロードして再生することが許可されているため、教室のWEB環境に関わらず、特定の表現が含まれる会話の音声を自由に利用することができる。

Basic English の授業では、大学内のWEB環境が整っているため教材の準備をしなくても直接WEB上でアクセスしたページから「一括再生」の機能により音声を再生させてディクテーション活動を実施できる（図17参照）。また、音声をダウンロードして利用する際、LEADでは音声ファイルを別の器材やアプリケーションで編集する必要はなく、使用したい台詞のみを選択して保存・再生ができるように設計してある（図18参照）。

図 1 7

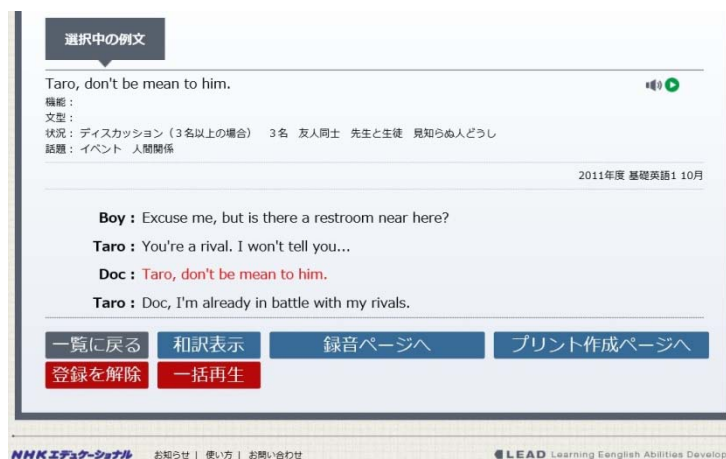


図 1 8



ディクテーションを取り入れるねらいは授業により異なるが、**Basic English** では音声を取り取る練習以外に、授業で取り上げようとする文法形式や表現に注意を向ける目的で冒頭に実施することが多い。運営の面からも、同じ教室の同じ席で同じクラスメイトと授業を受けることが通常の高校までの状況と違い、大学では授業ごとにほぼ毎回教室移動がありクラスメイトも入れ替わるため、賑やかなになりがちな授業の冒頭においてディクテーション・クイズのような活動と一緒に取り組ませることは、学生に気持ちを切り替えて授業に集中させることにつながる効果が期待できる。

例⑤ シャドウイング&ロールプレイ活動のための教材例

音読活動による指導効果は様々であるが、**Basic English** でシャドウイングの練習を取り入れる主な目的は、英語母語話者が自然に話す速さと英語のイントネーションに慣れさせることにある。速さを身につける練習はモノログでもできるが、イントネーションに関しては、話者の強調したい情報が自ずと強く読まれるため、文脈のある会話において繰り返すことでその上達が見込める。この練習のための教材準備において **LEAD** のように膨大な数の会話例を音声つきで使用できる ICT ツールほど効果的なものはないと思われる。例えば、例④－3の文が掲載されている会話は、そのままシャドウイング用の素材としても使用できる（図19参照）。

図 1 9

That's really sweet.

機能:
文型:
状況: 学校 対面会話 2名 友人同士
話題: 年中行事 本・新聞・雑誌など 招待 プレゼント

2001年度 基礎英語2 5月

Lisa : I'm buying some perfume and flowers for Mother's Day.What about you?
Takeshi : My dad and I are taking Mom out to dinner.
Lisa : **That's really sweet.** Where are you going?
Takeshi : We're not sure yet.Do you have any suggestions?
Lisa : I'm free after school, so let's go to the bookstore and find a restaurant guide.

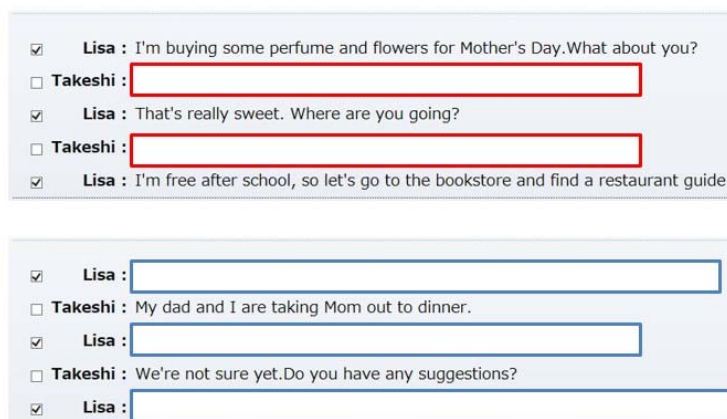
一覧に戻る 和訳表示 録音ページへ プリント作成ページへ
会話を登録 一括再生

また、LEAD では音声の部分利用も可能であり、会話に登場する特定の人物の発話のみを選択して再生させることでロールプレイ活動用の素材として利用できる。音声の選択は、画面上の会話から使用したい文にチェックを入れるだけで、再生する／しないの設定が完了する（図 2 0 参照）。Basic English で実際に使用しているロールプレイ活動用のシートは、音声再生される部分と学習者が読む部分をテキスト上でもそれぞれ視覚的にわかりやすいように強調して提示している（図 2 1 参照）。

図 2 0



図 2 1



洗練された英語データベースから特定の文法形式や表現に注目して会話例を抽出し、音声と一緒に提示することは、音声活動の量だけでなく質の向上にもつながる。ICT を活用したロールプレイ用の音声教材は、英語母語話者と対面によるコミュニケーションの機会が得られにくい環境にあっても、話者の置かれている状況と発話の目的を意識したイントネーション練習の機会を提供する。

5 - 3 社会言語学的知識と関連させた学習

例⑥ 対人関係を意識した言語活動のための教材例 —スピーチアクト「褒める」—

図 2 2

言語表現項目リスト | カリキュラム | LEAD 1/1 ページ

NAME: CLASS: / /

Awesome!
2005年度 基礎英語1 9月

■ ■

Lydia : Look. That's the theater.

Tom : Where? I can only see sand.

Mina : Under the sand. You can just see the top of it.

Tom : Oh, I can see it! Wow... that's **c** [] .

Lydia : It's over two thousand one hundred years old.

Tom : **A** [] :

Mina : I think it's **b** [] . These places under the sand are so old, and so mysterious.

2005年度『基礎英語1』9月（LEAD）を一部改変

コミュニケーションにおいて友好的人間関係を構築するための戦略として、Brown and Levinson (1987) は具体的に言語行動を分類している。仲良くなりたい／邪魔されたくないという欲求を満たす方向性で用いられるポジティブ／ネガティブ・ポライトネス・戦略 (Brown and Levinson 1987:70) のモデルには、英語学習者の円滑な対人コミュニケーションを促進するために取り組む言語活動に具体的な指針を示すものもある。例えば、例⑥に挙げた「褒める」という言語行為は、自国文化では多少不自然に感じられるくらい意識して実践してみると、英語によるコミュニケーションにおいて有効な戦略として実感できることもある。

表現の幅を広げるため、「褒める」という言語行為に絞って会話例を授業で取り上げようとするとき、LEADでは2通りの検索方法がある。1つは、<自由検索>の<センテンス>の下に分類される<機能条件>から「相手と仲良くする、交わる」と「祝福・賞賛」

(図23参照)、もう1つは<カリキュラム>の<言語表現項目リスト>の下に分類される<機能>から「褒める」(図24参照)で関連する表現を検索・収集することができる。言語形式だけでなく機能の情報もタグ付けしてあるデータベースの優れた点である。

図 2 3

機能条件 祝福・賞賛(congratulating)

事実(factual information)を相手に伝えたり、相手からひきだしたりする
 自分の態度(attitude)を表明したり、相手の態度を知ったりする
 相手を認めて物事を成し遂げる
 相手と仲良くする、交わる

挨拶(greeting people)
 注目(attracting attention)
 人に呼びかける
 紹介(introducing)
 祝福・賞賛(congratulating)
 去る(taking leave)

会話を上手に組み立てる
 会話で困ったこと・問題点を解消する

文型選択

上記すべての条件で検索

図 2 4

言語表現項目リスト>機能

機能 ▼

呼びかける 1 / 2 / 3
 相づちをうつ
 聞き直す 2 / 3
 礼を言う
 苦情を言う
 褒める
 謝る
 説明する
 報告する
 発表する
 描写する
 申し出る
 約束する
 意見を言う
 賛成する
 反対する
 承諾する
 断る
 質問する
 依頼する
 招待する

「褒める」という言語行為に関連して収集された会話例に見られる形容詞は、例⑥の空所に入る語 “cool” / “Awesome” / “brilliant” (図22参照) の他 “lovely” / “gorgeous” / “sweet” など様々ある。それぞれ使われる場面、対象が文脈から確認できるため、第二言語話者にとっては表現の幅を広げるための貴重な資料となる。さらに LEAD は検索から印刷に至るまでのテキスト準備だけでなく、音声の再生も支援するため、どのように褒める言葉が強調されて発話されるかに焦点を当てた言語活動を展開させることもできる。また、同様の言語活動を繰り返し実施する際にも、関連する素材を使っていくつも応用例を準備できることは ICT 活用の大きな利点である。

例⑦ 社会文化的な規則の理解を促す言語活動のための教材例
 — 「名前の呼び方」 —

図 2 5

文法項目リスト | カリキュラム | LEAD 1/1 ページ

NAME: CLASS: / /

I'm Laura Wilson.
 2004年度 基礎英語1 5月

■ ■

Mr. Oda : Everyone, this is your new classmate, .

Laura : Hi, everyone. I'm Laura Wilson. I'm from Boston in the United States. I'm 12 years old. I'm in the tea ceremony club. Thank you.

Mr. Oda : That's your seat, .

Laura : Thank you.

2004 年度『基礎英語 1』5 月 (LEAD) を一部改変

英語で相手の名前を呼ぶとき、Mr./Ms. + ファミリー・ネームあるいはファースト・ネームのみを使うという原則があり、初対面の人、目上の人に対しては敬称を用いる前者が好まれる傾向があるが、こうした社会言語学的知識に則った言語使用は英語圏の文化に触れる機会の少ない学習者にとっては必ずしも常識ではない。

実際に、相手のファミリー・ネームだけで相手と呼んでしまう例や、逆にファースト・ネームに敬称をつけてしまうといった例は Basic English クラスに限らず、日本人学生の英語クラスにおいても少なからず見受けられる。また、Wilson Teacher のように母語では可能な名前と職業を組み合わせたり、“What’s your name?” や “Who are you?” のように意図せず失礼な印象を与える言い方をしたりする適切さの問題は、言語形式の知識とは別に英語圏の社会文化的な規則と関連させて指導する必要がある。

このような場面と人間関係を意識した言語活動の実施に際して ICT は大きな支援となる。特に LEAD にある会話例のように、もとなるデータベースがまとまったシリーズ(年度ごとに放送された NHK 語学番組『基礎英語』)であれば、図 2 5 の例に登場する人物およびその家族が様々な人と接する場面を検索し、それぞれ会話で名前の呼び方に注目させる資料として利用できる(図 2 6 参照)。

図 2 6



英語での名前の扱い方に関する社会言語学的知識は、場面と人間関係の設定がはっきりしている会話例において提示する演繹的な指導も有効であると考えられる。ICT を活用した教材は提供できる情報量や社会文化的規則を意識したロールプレイなど言語活動への応用性において、従来の紙媒体のテキストよりも充実している。

6. まとめと今後の課題

本稿では「これからの時代に適応した新たな教育・学習環境の構築を目指した教育実践活動」として NHK 英語データベースをもとに運用されている英語教材作成支援システム LEAD を例に、ICT の言語活動への導入について取り上げ、その利点を明らかにした。学習者の英語によるコミュニケーション能力育成を念頭に、ICT を活用した教材導入のねらい、作成の技術、および実践の方法を7つの例にまとめた。本学国際コミュニケーション学科 **Basic English** の授業における、推測と発見を促す言語形式や表現の導入、発話意図を考慮した音声活動、場面と人間関係を意識した適切な言語使用を促進する社会言語学的知識の学習の3つの言語活動において ICT が有効に活用される可能性を示した。

今後の課題として、本学において ICT を活用した言語教育をさらに発展させていくため、以下3点の目標を掲げる。

1) 大学の独自データベースの構築とそれを活用する仕組みの追求

本学で長年にわたり独自に開発されてきた多数の良質な英語教材を、ただ蓄積してだけでなく、データベースを構築して貴重な資源として再利用できるように新たなツールを開発する可能性について検討する。

2) ICT を活用した教材の作成・授業に導入する技術の発展と普及

本稿で取り上げたデータベースの活用は ICT の利点の一部を示したに過ぎず、他の教育職員との間で実践例を共有する機会をつくり研鑽し合い、運用する側の技術の発展と普及を目指す。

3) ICT を活用して実践した言語活動の学習効果の研究

本稿の教育実践活動の例として報告した ICT を活用した言語活動について、実践結果の分析と考察を行い、それぞれの学習の効果を検証していく。

参考文献

- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Universals in Language Use: Politeness Phenomena*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Canale, M. and Swain, M. (1980). "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing" in *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Canale, M. (1983). "From communicative competence to communicative language pedagogy." In Richards, J. C., & Schmidt, R. W. (Eds.), *Language and Communication*, 2-27. London: Longman.
- Hymes, D. (1972). "On Communicative Competence." In J. B. Pride, & J. Holmes, (Eds.), *Sociolinguistics*, 269-293. Harmondsworth: Penguin.
- 木村松雄 (2011). 「英語教育の目的と小・中・高の連携」木村松雄編『新版 英語科教育法－小中高の連携-EGP から ESP へ』5-31. 学文社.
- 塩澤正 (2010). 「なぜ文化を外国語で教える必要があるのか」塩澤正・吉川寛・石川有香編『英語教育学大系 第3巻 英語教育と文化－異文化間コミュニケーション能力の養成』9-15. 大修館書店.

英語教材作成支援システム

- 『基礎英語 LEAD (Learning English Abilities Developer)』 (2014). NHK エデュケーショナル.